みんぱくリポジトリ

西洋との接触:白い霊がやって来た: パプアニューギニアにおける接触史

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2015-11-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 槌谷, 智子
	メールアドレス:
URL	http://hdl.handle.net/10502/3686

白い霊がやって来た ----パプアニューギニアにおける接触史----

槌 谷 智 子*

はじめに

Ⅲ 文書記録と語りの比較分析

I 文書記録から見るフォイの「最初の接触」の可能性

N 「最初の接触」という出来事の再構成 おわりに

Ⅱ フォイの老人が語る「最初の接触」

はじめに

西欧人とパプアニューギニアの「土着」の人々との「最初の接触(ファースト・コンタクト)」は、文化人類学者ばかりでなく、一般の西欧の人々から多くの関心が持たれてきた。それは、文明とは無縁の世界に生きていた人々が、突然西欧文明と遭遇する歴史的・劇的な瞬間として、好奇心を喚起する出来事であった。

現在のパプアニューギニアという国家の領土の内、北部がドイツ、南部がイギリスの保護領となったのは1884年のことであった。その後、イギリス領ニューギニアは1905年にオーストラリア領パプアとなり、ドイツ領ニューギニアは、第一次大戦後、オーストラリアの国際連盟委任統治領となった。海岸部に比べ、内陸部の植民地統治はなかなか進まず、パプア側では、ようやく20世紀に入ってから、オーストラリアのパトロール隊によって海岸から未踏破の内陸への探検が試みられるようになった。その目的は、当時一般的に「野蛮人」と見なされていた土着の人々に西欧文明と法の秩序をもたらすため、すなわち、植民地行政府による統治領域を拡大していくためであり、同時に、金や石油・石炭などの天然鉱物資源を発見するためであった。パトロールが入った地域では、集団間の戦争や食人、その他法に反する事が禁止された。しか

Key Words: Foi, first contact, white spirits, colonial documents and native narratives, reconstruction of the incident

キーワード:フォイ、最初の接触、白い霊、文書記録と語り、出来事の再構成

^{*} 東京大学大学院

し、険しい地形のため、内陸部へのパトロールは困難をきわめ、内陸部奥深くの山岳 地帯まで達するのは容易ではなく、いわゆるニューギニア高地に人が住んでいること が確認されたのは1930年代に入ってからのことであった。当時、パプアとニューギニ アは外部(西欧)と接触したことのない、世界でも数少ない地域の一つであった。今 日における最後の、西欧世界を知らない人々との接触という出来事は、「現地の人々 が驚愕し,混乱することによって,しばしば西欧人に自己満足と楽しみを与えた」の である (Schieffelin 1991:5)。

オーストラリア放送協会が制作したドキュメンタリー・フィルム『ファースト・コ ンタクト』(Connolly and Anderson 1983)には、「最初の接触」を経験したニュー ギニア高地の老人達へのインタビューが多数収録されている。この中で彼らはロ々に 「霊だと思ったので、白人は怖かった」と述べている。また、人類学者らの現地調査 によって、様々な地域で、パトロールによる最初の接触時に、現地の人々は外部から 自分達の世界に突然侵入してきた「見知らぬ存在(Strange Beings)」を,帰ってきた 神話的ヒーローと考えたり、戻ってきた祖先の霊であるとみなしたことが明らかにさ れている (Schiffelin and Crittenden 1991)。人々はその存在を驚愕し、恐れ、戸惑い、 時にはその到来が恐ろしい世界の大変動の前兆であると怖れたのである(Schieffelin 1991: 3)_o

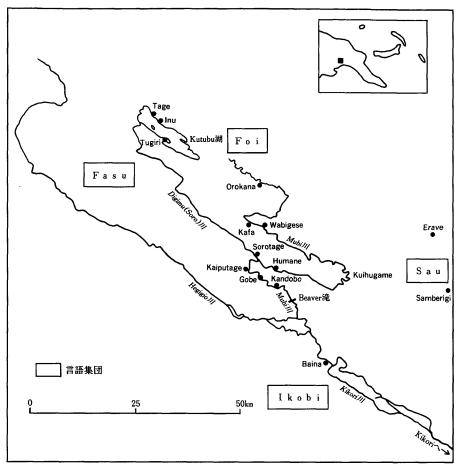
一見すると,現地の人々による「最初の接触」についての話は,パトロール隊側, すなわち西欧側の一方的な見方を排し、この出来事を現地の人々がどのように経験し たのかという,「現地の人々の視点」を明らかにすることのように思われる。しかし, ことはそんなに単純であろうか。奇妙なことに,最初の接触については,人類学者が 質問しない限り、人々の間で自発的に話されることは少なく、若い世代にはあまり知 られていないのである(Schieffelin 1991:9)。筆者が調査した南部高地州に居住する フォイ族(Foi, 以下単にフォイとする)においても同様であり,筆者の質問に対し ては、「白人が初めて来たとき、白い霊がやってきたと思って怖かった」と皆一様に 語るが、こちらから質問しない限り、この話題が人々の間で取り上げられる場面に出 会うことはほとんどなかった1)。また、ごく一部の老人以外には、既にその時の状況 の詳細を知る者はなく、「白い霊がやって来た」という表現だけが一人歩きしている かのような印象を受けた。フォイでは,ロングハウスで様々な話題が出る。特に神話 や伝説、過去の出来事は、子供達をはじめ人々が喜んで話題にする。しかし、それに もかかわらず,「最初の接触 | の詳細が若者にほとんど語り継がれていないように見 受けられるのは、筆者には奇妙なことに思われた。

ニューギニアにおける「最初の接触」は、時期的にも地域的にも、またその当時の 状況が様々に異なるにも関わらず、ニューギニアの広い地域で、一様に「霊がやって きた」という語り方が報告されており、フォイの「最初の接触」においても、その一 種の類型化された語りが繰り返されているのである。本論の目的は、フォイの「最初 の接触」について、パトロール報告書と現地の人々の話という二つのデータを比較分 析し、フォイの事例を通して、最初の接触を「霊がやって来たと思った」と述べるこ と自体の意味を検討することにある。

フォイの「最初の接触」に関連した研究としては,Hope (1979),Kurita (1985), Schiefferin and Kurita(1988)がある。フォイと隣接するファス族の「最初の接触」 は,1911年と推定されているが(Kurita 1985),フォイに関してはこれまで余り明確 ではなかった。フォイの「最初の接触」についての現地の側の情報は、Kurita (1985), Schiefferin and Kurita (1988) の中で、ファス族の老人の伝聞情報で触れら れているにすぎない。そこで,まず初めに,フォイと「最初の接触」をした可能性の ある文書記録を検討し2)、フォイの最初の接触がいつ・どのパトロールによるもので あったかを推察する。続いて、筆者が聞き取り調査したフォイの老人から得た「最初 の接触」についての話を取り上げ、文書記録と老人の話との一致点と相違点を検討す る。当然の事ながら、これは「客観的事実」としての過去(歴史)を再構成しようと いう目論見ではない。このような作業を行う目的は、彼らの歴史的出来事の解釈にお けるズレとゆらぎを明らかにすることにある。従って,文字によるパトロール報告書 と老人の話との差異は,どちらが真実でどちらが虚偽であるのか,という問題の設定 はしない³)。いずれも主観的に構成された「客観的な」物語である。いつ,どこで, 誰が,何を,どのように,なぜ行ったのかという双方の情報を整理し,情報のズレの 意味を考察する事に意味があるのである。そして最後に、「白い霊がやって来た」と 語られることの意味について再検討したい。

I 文書記録から見るフォイの「最初の接触」の可能性

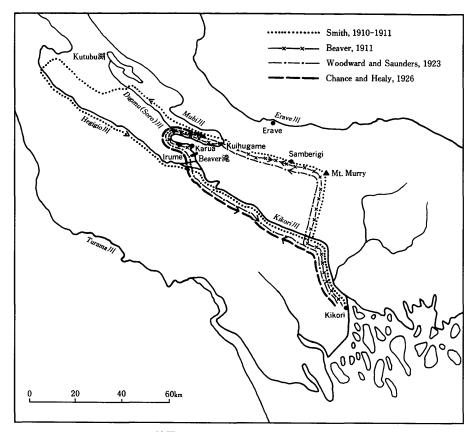
フォイの居住地域は、南部高地州の高地周縁部に位置し、クトゥブ(Kutubu)湖周辺及びムビ(Mubi)川流域にある。フォイの居住地域の南にはイコビ族(Ikobi、以下イコビとする。フォイではケワと呼ばれる)、西はファス族(Fasu、以下ファスとする)、東にはサウ族(Sau、以下サウとする。フォイではフォラバと呼ばれる)が居住する。(地図1参照)



地図1 Kutubu 地域およびその周辺に住む言語集団と低地フォイのコミュニティ

フォイの「最初の接触」の可能性は、第一に1910-1911年にかけて行われた Smith のパトロール, 第二に消息の分からなくなった Smith を探すために行われた Beaver の探索パトロール, 第三に1923年に行われた Woodward と Saunders のパトロール, 第四に1926年の Chance と Healy のパトロールの4つである (Kurita 1985; Weiner 1988: 25-27)。(地図 2 参照)4)

いずれのパトロールも、パプア湾南岸のキコリ (Kikori) を拠点としている。キコ リには1912年に行政府のステーションが設立された。キコリにはキコリ川が流れ込み、 キコリ川の上流はヘギギョ川 (Hegigio) と呼ばれ、ファスの領域である。ヘギギョ 川がキコリ川に名前の変わる辺りでムビ川が合流する。ムビ川には、クトゥブ湖から



地図2 4つのパトロールのルート

流れ出るディギム川 (Digimu, フォイではソロ川と呼ばれている) が合流しているが、 クトゥブ湖とディギム川によって、フォイとファスの居住領域は分割されている。(地図 1 参照)

この4つのパトロールが通った可能性のあるフォイの居住地は、キョリ川への合流 地点に近いムビ川下流域の「低地フォイ」と呼ばれる地域で、現在はムビ川沿いに7 つのロングハウス・コミュニティが存在する(地図1参照)が。筆者が調査を行ったの は低地フォイであり、本論のデータはすべて低地フォイのインフォーマントから収集 したものである。

オーストラリア行政府による定期的なパトロールが開始される以前は、各父系クランが各自の土地にロングハウス・コミュニティを形成するか、友好関係にあるクランが共同でロングハウスに暮らしていたが、いずれも小規模な単位であった。また、ロ

ングハウスが老朽化したり、さまざまな争いが起こると、クラン成員はしばしば離合 集散しながら住居を移動していた。

行政府はパトロールを行うための拠点となるパトロール・ステーションを1937年に クトゥブ湖畔のトゥギリ(Tugiri)に設置したが,第二次大戦により閉鎖され,本格 的にこの地域にパトロールが行われるようになったのは1950年代からである。その後, 行政府の指導により、土地が隣接する複数のクランがまとまってロングハウス・コ ミュニティを形成する現在のような居住形態になった。また,これと時期を同じくし てキリスト教の布教が始まったり。

ロングハウスは内部を壁で男性と女性の空間に仕切る形式の家屋もあったが,現在 は男件はロングハウスに、女性と子供はロングハウスの周辺にある各自の家屋に暮ら している。フォイは,サゴ椰子の髄から採取するデンプンを主食とし,焼畑移動農耕 と狩猟採集から得る食物で補っている。豚の飼育や菜園耕作のための出作り小屋と、 ロングハウス・コミュニティを行き来する生活形態をとってきた⁷⁾。

次に、フォイと接触した可能性のある4つのパトロールを年代順に検討していく。 (地図2参照)

(a) Smith のパトロール

1910年11月, Smith 他 4 人の白人と25人のニューギニア人警官, 50人のニューギニ ア人荷物運搬人夫が,キコリ川上流から内陸部を横断してストリクランド川へ出ると いう未踏地探検計画を立てて出発した。途中で備蓄が欠乏してきたため、2人の白人 と47人のニューギニア人は引き返してキコリへ無事に帰還したものの,その後の Smith 幸の消息は途絶えた。Smith のパトロール隊は,川を下ろうとして筏が転覆し て7人の人夫が溺れ、さまざまな装備品や食料、さらに Smith のノートと地図をも 失い、道に迷ってしまったのである。そのためパトロール隊の正確なルートの記録は 残されていない。しかし,Schiefferin and Kurita(1988)が,Smith の記憶による報 告書, Smith を探しに出かけた Beaver の報告書, さらに現地調査によるインフォー マントの情報などから,綿密にルートを検討している。それによれば,キコリからサ ンベリギ(Samberigi)渓谷を経て西に向かい、ムビ川にやって来て、川を渡った後、 現在のソロタゲ(Sorotage)・コミュニティのある場所の近くを通過し、ディギム川 東岸沿いに遡り,クトゥブ湖近くで川を渡り,ファスの領域を一周するように北西へ 進み,ヘギギョ川からキコリ川に下って,キコリに帰ったのではないかと推定されて いる。帰りのルートは、フォイの領域を通過していない。

Smith がムビ川を渡ったと推定されている場所は、現在のフマネ(Humane)・コミュニティの上流にあたる。この辺りは、フォイではクイフガメ(Kui huga me)と呼ばれ、かつて複数のロングハウス・コミュニティがあったが、戦闘により多くの死者を出し、生き残った者は全員サンベリギや低地フォイに逃げたと言われている。その子孫はわずかで、さまざまな伝承は途絶えてしまっている。クイフガメはサウとフォイの領域の境界にあたり、現在フマネ・コミュニティに暮らす子孫によれば、日常両方の言語を話していたという。Smith の報告書によれば、パトロール隊は、「大きなゆったりした流れの川を、現地の人にカヌーで渡らせてもらった」となっているが(Schiefferin and Kurita 1988: 65–66)、この現地の人とはフォイであったのかどうかの確認はとれない。また、Smith のパトロールは、偶然そこにいた数人と出会っただけなのか、フォイのコミュニティと接触したのかも不明である。フマネ、ソロタゲ両コミュニティをはじめ、フォイには Smith と出会ったと思われるような伝承はない。Smith のパトロールはフォイの領域を通過したものの、フォイとの接触があったかどうかは不明である。

(b) Beaver のパトロール

1911年2月、Beaver は消息を断った Smith のパトロール隊を探すために出発した。 3人の白人と92人のニューギニア人が同行した。 Smith の足どりを追ってキコリからサンベリギまでやって来た。ここで病気になった白人1人に36人のニューギニア人を同行させてキコリへ帰し、残りのパトロール隊はやがて川に到着した。現地の人から、この川が「Mobi」という名前であり、 Smith は Mobi 川をカヌーで渡り、「Kiko」という川を漕いで行ったと身ぶりで教えられた。現地の人をガイドに Mobi 川西岸を上流へ進み、多くの菜園や小さな家々(出作り小屋)を見つけた。さらに進むと、1つの大きな家(ロングハウス)と11の小さな家(女性の家屋)からなる村に到着した。人々は友好的で、彼らから食べ物を交易で手にいれた。たくさんのカヌーがあり、人々はしんちゅうと鉄の破片を多数持っていた。川岸をさらに上ると、非常に長く起伏のある峡谷があり、川は激流だった。ここを過ぎると、たくさんのサゴ椰子と小道があった。キャンプへ現地の人々がやってきて、この近くに大きな川があること、Smith は Kiko 川へ行ったことを教えられる。川の対岸の石灰岩の断崖の上に、かなり大きな村があった。そこの人々は Smith のキャンプした所へ連れて行こうと申し出た(Hope 1979: 21-36)。

四方八方へと Smith の足どりを探ず中で、人夫の疲労も増し、食料も枯渇してき

たため、キコリへ引き返すことにする。同じルートを帰るよりもカヌーで海岸まで下っ た方が良いと判断し、初めに Mobi 川に出会ったキャンプ地に戻り、現地のカヌー を16隻購入した。途中,峽谷と急流の連続で4隻を失った。さらに,近くに大きな滝 があるためにカヌーで下れないことがわかり、Mobi 川に沿って引き返し、たくさん の村と村をつなぐ小道を通って、最初のキャンプ地へ戻った。親切な老人がカヌーで 川を渡らせてくれた。そして、来たのと同じルートを引き返し、サンベリギを通って、 キュリへ帰った(Hope 1979: 36-42)。

Beaver 達を阻んだ滝は、後に Chance と Healy によって再発見され、ビーバー滝 と名付けられた。ビーバー滝は現在のカンドボ(Kandobo)・コミュニティのすぐそ ばにある8。Beaver は、西欧人では初めてムビ渓谷に足を踏み入れたとされる。

Beaver の報告書には「Mobi 川」という名称が記載されていることと、詳細な地理 的記述から判断して、交流した現地の人々とコミュニティはフォイである可能性が高 い。Beaver がムビ川に出会った場所は、おそらく現在のフマネ・コミュニティの上 流辺りであり、そのさらに上流で発見した2つのコミュニティは、おそらくクイフガ メ付近にあったのであろうと推察される。既述したように、クイフガメはサウとの境 界付近にあたるが,Beaver のパトロールがフォイとの「最初の接触」であった可能 性が高い。一つ疑問なのは,クイフガメから現在のフマネ・コミュニティまで,険し い峡谷と急流があるため,現地の人々はカヌーで下ることはない。途中ひどい急流の ためにカヌーや物資を失った Beaver は、「現地の人々は、我々が災難に会うのを承 知で,カヌーで行けると思わせたに違いない。[流されたものを拾えなかった]結果 に失望したことだろう」と記述しているが (Hope 1979: 37), 友好的に接し, カヌー を譲り渡したのにもかかわらず,Beaver 達が災難に会うことを期待していたとは考 え難い。あの急流で流されたものを拾うことを期待していたとも考えられない。なぜ、 現地の人々が Beaver 達をカヌーで行かせたのかは、疑問である。

一方,フォイでは Beaver と接触したと思われるような伝承は全くない。もしも, Beaver との友好的な出会いや交易があったのにもかかわらず、現地では伝承されて いないとしたら,現地の人々にとっての「最初の接触」とは何であったのかを考える 上で興味深い。この点については、後に検討する。

(c) Woodward と Saunders のパトロール

1923年の Woodward と Saunders のパトロールは、キコリからサンベリギを経て ムビ川に来るまでは、Smith と Beaver のルートとほとんど同じで、その後ムビ川沿

いに下って、キコリ川へ出て、キコリ・ステーションに帰るというルートである (Kurita 1985: 60; Hope 1979: 94–95)。

もしこのルートが地理的に正確であれば、ほぼ低地フォイの領域を横断している。しかし、Woodward と Saunders のパトロールの目的は、前年にパトロールしたサンベリギへの別のルートの探訪にあり、フォイとの接触を意図したものではなかった。 Woodward と Saunders はキュリへ帰るためにムビ川を通ったにすぎない。サンベリギ渓谷の人々については記述があるが、フォイと接触したという記述はない(Hope 1979: 94–95)。フォイでも Woodward と Saunders に接触したと思われるような伝承はない。このパトロールについては、詳しい資料がないため判断が難しいが、Woodward と Saunders がフォイと接触した可能性は低いと思われる。

(d) Chance と Healy のパトロール

1926年の Chance と Healy のパトロールについては、Hope によって詳細に記述されている。行きのルートはこれまでのパトロールと違い、キコリ川をムビ川との合流 点近くまでカヌーで上り、徒歩でムビ川へ出て、ムビ川をカヌーで遡っている。そして、再び同じルートを下ってキコリへ帰っている。これは海岸部からフォイへの交易ルートに一致する。

Chance のパトロールはフォイと接触するために行われた点が、これまでのパトロールとは異なり、フォイについて詳しく記述されている。後述するフォイで得た話とも多くの点で一致している。

以下に,Hope (1979: 116-121) から引用して,パトロールの概略を記述する。

バトロールのきっかけは,1926年イコビ族のディキマ村のマトコラという男性がキコリの政府のステーションを訪ねてきたことだった。彼はソソゴにあるディキマ村がフォイ(Foi'i)に襲撃されたと訴えた。Chance と Healy は,この年イコビの居住地域をバトロールして,ナワゲラへは行ったものの,ディキマ村までは行かずに引き返したため,ディキマはまだ接触した事のない村だった。マトコラによると,フォイとディキマ村はそれまで友好関係にあった。しかし,ナワゲラのクマという男性が政府の支給する制服を受け取り村のコンスタブル(constable) 9 になった,と聞いたフォイのヘッドマンのポイイマブが,人を集めてディキマ村を襲撃した。ボイイマブはディキマ村のヘッドマンのキカウソを殺し,この襲撃で若者 1人を除く全員が殺されてしまった。

Chance と Healy はフォイの襲撃事件を調査し、フォイを見つけ、さらにムビ川からサンベリギへ行こうと計画をたてた。ムビ川は、Beaver が下るのを阻まれ、Woodward と

Saunders の帰り道のルートであるが、ムビ渓谷に住むフォイについてはほとんど知られて いなかった。

マトコラはソソゴでパトロールを待っていて、パトロール隊と合流してキコリ川を渡っ た。川の中洲で対岸にフォイの威嚇のサインである矢が突き刺してあるのを見つけた。中 洲に1泊すると、翌日フォイの一団が対岸からやってきて「ポイイマブは、イコビのクマ がコンスタブルの制服をもらったのに,彼の父親が制服をもらっていないことに非常に腹 を立てていて,もしパトロール隊が川を渡れば全員殺す,パトロール隊がいなくなり次第 クマを殺しに行く、と語っている」と言う。マトコラを除いて、ディキマ村の人夫は全員 逃げ出してしまった。

Chance らはポイイマブらを逮捕するために川を渡り、発見したカヌーでムビ川を上り、 無人の村ウドゥカルアにキャンプした。その約5マイル北に3つの村があった。パトロー ル隊は4人の男性がカヌーの中にいるところを見つけたが、彼らは武器をカヌーに残して ブッシュに逃げてしまった。マトコラは,パトロール隊がフォイを射殺しないのに嫌気が さしていなくなってしまった。ムビ川に沿ってさらに上流の村にキャンプを移動し、夜、 Healy と警官(ニューギニア人)が、このキャンプ地から別の2つの村を急襲したが、誰 も捕まえられなかった。キャンプへ上る帰り道を探している時,ポイイマブと数人の男性 がカヌーにいるのを見つけた。彼らは弓矢を放ってきた。

その後 8 日間,Chance,Healy,警官は,時折フォイを見かけても捕まえる事はできな かった。見かけたカヌーを全て押収し、一人の男性を捕まえてキャンプに連れ帰った。キャ ンプ地の下方にあるイルミ村を急襲したが、ロングハウスはすでに焼けて灰になっていた。 マトコラが火をつけたのだろうというのが警官達の一致した考えだった。

さらに5日後,もとのキャンプ地ウドゥカルアに戻る事に決め,カヌーで川を下った。 ウドゥカルア村付近に達し、角を曲がろうとした時、すぐ目の前の川岸近くから煙が上がっ ているのが見えたため、Chance と Healy はカヌーにとどまり、警官だけが上陸した。や がて2発の銃声が聞こえ、1人の男性が川に飛び込み、泳いで川を渡ろうとした。男性を 捕まえるため、Chance は3人の漕ぎ手と急いでカヌーを近づけた。さらにもう1人の男 性が川に飛び込んだが,別のカヌーによって,川岸に戻らされた。人夫達が岸にあげよう としたが、男性は逃れて再び川にもぐって、木の根を摑んで溺れ死んだ。死んだ男性の名 はメメリマブといい,たくましい体格の見本のような男だった。武器を携帯したコンスタ ブルが下腹を押さえていた。ある男に殴り倒されたので、その男を撃ったが、当たったか どうかは分からないと述べた。警官は5人の男性を捕まえたが、その内2人は少年だった。 ロングハウスの廻りを歩くと、炎が見え、竹筒の中のキャベツが散らばっていた。料理の 火だろうと思い,そのままにして,死体をカヌーに載せていたとき,ロングハウスは炎に 包まれ,男性達が飛び出してきた。その日は,ウドゥカルア村にキャンプした。死体は埋 められ、2人の少年は翌日解放された。Chance はサゴ椰子を切った場所をさして、その 支払として2人に贈り物をした。食料が枯渇してきたのでキコリに戻る事にしたが、来た

のと同じルートをゆっくり帰るのは気が進まなかったため、カヌーで川を下り、巨大な滝 に遭遇した。この滝を発見した Beaver にちなんでビーバー滝と呼ぶ事を提案した。来た 道を同様に引き返して、捕えた男性達に案内されて陸路を横断し、キュリ川に着き、再び マトコラに会った。ナワゲラに到着して1泊し、キコリ・ベースキャンプに帰った。

以上が、Chance と Healy のパトロール報告書からのフォイとの接触である。次に、 筆者がフォイから得た情報を述べる。

Ⅱ フォイの老人が語る「最初の接触」

カンドボ・コミュニティに住むバイマボ(推定70歳前後)という最年長の男性は、初めて白人がやってきた時幼児であったものの、「最初の接触」を体験したと言われる唯一の生存者であり、この出来事を最もよく知る人物だった10。彼の父親はパトロール隊によって殺されたと伝えられ、他の人に比べてかなり詳細に出来事を記憶していた。他の老人達は、白人との「最初の接触」について質問すると、しばしば自分達が白人と最初に接触した出来事、すなわち1937年の Champion と Andersen のパトロールの話がなされた。以下に記述するフォイの側から見た「最初の接触」は、バイマボから聞いた話に基づいている。(地図 2 参照)

初めて白人がやってきた時,自分はまだ幼児だった。その頃,ここの男達と下の男達(イコビ)とは戦闘を繰り返していた。白人は戦闘を止めさせるために,キコリ川を上ってきて,昔村があったカルア(Karua)にやってきた。皆は驚いてムビ川の対岸のブッシュに逃げだした。私も母に連れられてブッシュの中に逃げ込んだ。そして白人はクイフガメへ行ってしまった。皆ブッシュに隠れてしまったので,どのようにクイフガメへ行ったのかは知らない。クイフガメからフマネ(現在のコミュニティ名)に戻ってきて,スグカ(バイマボの母の兄弟にあたる)が菜園でキュウリ¹¹⁾を食べているところを捕まえた。

カルアでは、白人がいなくなったので勇敢な男達が数人偵察にもどっていた。そしてカビア(穂を食用する植物)を料理して食べているところに突然白人が戻ってきた。驚いて逃げようとしたが、警官(bia kui, 文字通りには「弓」)がベアゴを捕まえた。それで私の父のメメノマボがその警官を弓矢で射って逃げた。警官は倒れ、ベアゴは逃げ出した。別の警官が、家に逃げ込もうとしていた父の肩の下を、後ろからショットガンで撃った。父はムビ川に落ちて死んだ。人夫が水中メガネで川の中を探し、遺体をロープで縛ってカヌーに引き上げ、埋葬した。この時、死体を土に埋めるのを初めて見た12。父以外誰も死ななかったし、白人が家を焼いたという事はない。

翌日、白人達はセサゴレ(ヘギギョ川へ出るブッシュ道)を通って帰って行った。その 時キスグ,スグカ,ケタブボゴを監獄へ入れるために連れて行った。その時には誰も監獄 というものを知らなかったが、後にわかった。ワモノメナとタミナも捕まえられたが、子 供だったので連れて行かずに、鏡、布、ブッシュナイフ、斧、マッチを一つずつくれた。 白人は、自分達はもう戻ってこないので、皆に帰ってくるように話しなさいと言って去っ て行った。キスグとスグカはモゴラ(セサゴレ道がヘギギョ川にぶつかる地点)から夜逃 げ出して帰ってきたので、キコリへ行ったのは、ケタブボコ1人だけだ。ケタブボコはコ ンスタブル(kosa'ae、文字通りには「制服」)になって戻ってきた。

しかし、白人が本当に最初にやってきたのは、これよりも前だ。その当時ケワ(イコビ) とここの人達(低地フォイ)が戦争をしていて,ケワの人をたくさん殺した。それで,ケ ワのマデワラがキコリにこのことを話しに行った。フォイを捕まえるためにケワが白人を 連れてきた。フォイの男達はケワと戦うために、かつて大きな村があったケレレハビ(現 在のゴベ・コミュニティの対岸近く)に集まっていた。ケワの男達を待ちかまえていると、 白人がやってきて、銃を空に向けて撃った。その音に驚いて、皆バラバラに逃げだしたの で、実際には白人の姿を見た者はいない。誰もがこの音を大きな雷だと思い、とても怖かっ た。我々は皆殺されてしまうだろうと思い,ブッシュに逃げた。これがたぶん白人がやっ てきた最初だろうと思うが、誰も姿を見ていない。どの道を通って来たのかは知らないが、 キコリから来て、セサゴレ道を通ってケレレハビに来た。ここで1泊して、帰って行った。

Ш 文書記録と語りの比較分析

Chance と Healy のパトロール報告書とバイマボの話を照らし合わせると,両者は 非常に一致点が多い。ヘギギョ川には大きな中州があり、そこは低地フォイの領域で ある。パトロール報告書では「ウドゥカルア」村にキャンプしたと記述されているが、 バイマボの言う 「カルア」 のことではないかと思われる。 別のインフォーマントは 「カ ウワカルアに住んでいた頃、白人が来て、カウワカルアからイルメへ歩いていき、帰 りはカヌーで来て、メメネマボをショットガンで撃った。」と述べている。ウドゥカ ルアの北5マイルの所に3つコミュニティがあったというのは,現在はゴベ,カイブ タゲ,ソロタゲ,フマネの各コミュニティに住む人々のロングハウスであったと推測 される。パトロール隊が1人の男性を捕まえてキャンプに連れ帰ったという記述も, フマネのスグカが捕まえられた話しと一致する。「イルミ」村というのは,現在はゴ ベ・コミュニティに暮らすイル・クランの人々の土地「イルメ(Iru me)」と推察さ れる。フマネ・コミュニティの近くからイルメへ通じる道がある。その後、男性達が 料理していた所に突然パトロール隊がやってきて、銃で撃たれた事、メメノマボ(報

告書ではメメリマブ)が川に落ちて死に、カヌーに引き上げられて埋葬された事、5 人が捕まったがその内2人は子供だったので贈り物をもらって解放された事、キコリ への帰り道のルート等は全てパトロール報告書とバイマボの話が一致する¹³。

Chance と Healy のルートとそこで起きた出来事について、文書記録と現地の老人の話を比較検討した結果、細かい矛盾はあるものの、食い違いは大きいとは言えず、フォイで語られている「最初の接触」は Chance と Healy のパトロールであることは間違いない 14 。歴史的にフォイと最初に接触したのはBeaverであったとしても、低地フォイで伝承されている「最初の接触」は Chance と Healy のパトロールである。

文書記録と語りの間でズレが見られるのが、なぜこのパトロールが行われたのかということと、どのように男性が死んだのか、という点である。

パトロール報告書では、イコビのマトコラがフォイに襲撃されたことを報告に来たため、事件の調査と犯人の逮捕のためにパトロールが行われた。バイマボの話では、マデワラ(報告書ではマトコラ)が白人を連れてきたのは、別のパトロールになっている。バイマボの話は、1926年のパトロールが2つのパトロールになってしまっている可能性が高いと思われる。こうしたことは、歴史的出来事の伝承では珍しいことではない。

死亡事件については、パトロール報告書では、コンスタブルが下腹をなぐり倒されて、相手を銃で撃ったが、当たったかどうかはわからないと話し、メメリマブ(メメノマボ)は捕まらないために川に潜って自分で溺死した、となっている。メメリマブが撃たれたという記述はない。バイマボの話では、メメノマボ(メメリマブ)は捕まった仲間を助けようと警官を弓矢で射って、別の警官から銃で撃たれて川に落ちて死んだ、とされている。

メメノマボを殺され、復讐しようと考えなかったのかという筆者の質問に対し、バイマボは、「ケワ(イコビ)の誰かが来て殺したのならば怒って復讐しただろうが、何かわからないものが来たので戦おうとはしなかった」と説明した。そして、父親の射殺事件が起きた原因についてこう語っている。「白人を見て、死んだ人の霊(amena ho)がやってきたと思い、怖くて逃げた。霊に触ったら、くっついて手が離れなくなるからだ。白人も警官も父を殺すつもりはなかったが、父達は霊におびえて逃げようとしたところ、ベアゴが捕まり、ベアゴが殺されると思って父が弓矢で射ったので、警官が父を銃で撃ち、事件が起こってしまった。」

出来事とは、後から原因が遡及されることによって、因果関係が説明される。その際、その人の置かれた状況、立場、政治的要因などがしばしば影響する。現地人を射

殺することをなるべく避けたかったパトロール隊の立場をふまえて,このパトロール 報告書は読まれるべきであろう。むしろここで注目するべきことは、バイマボが父親 の射殺事件は、「白人を霊だとみなした」誤解から生じた偶発的事件と解釈している ことである。

「最初の接触」という出来事の再構成 V

バイマボは、「父親達は白人を死者の霊だと思っておびえた」と言うが、フォイで は白人の存在が Chance と Healy のパトロール以前に知られていた可能性が高い。 第一に、Smith と接触した可能性を完全には否定できない。もし、接触していないと しても、ファスを通じてフォイは Smith に関する情報を手に入れていたと思われる。 なぜなら, Beaver はフォイから Smith がすでにキコリ川を下ったと教えられている からである。第二に、Beaver と接触した可能性が高いことは既に述べた通りである。 Beaver の記録によれば、フォイと思われる現地の人々と友好的な出会いをし、交易 まで行っているのである。第三に、すでにイコビから白人の情報を手に入れていたと 思われる。パトロール報告書によれば,イコビは白人と接触しており,コンスタブル も指名されていた。フォイのヘッドマンは,自分達がもらっていないコンスタブルの 制服をイコビのヘッドマンが白人からもらったことに腹をたて,イコビの村を襲撃し たのである。

ニューギニアでは、白人との接触以前は、集団間の戦闘を繰り返していたため、集 団がそれぞれ独立した生活を営んでいたが,一方では交易などを通じて様々な情報が コミュニティからコミュニティへとかなり素早く伝達されていた (Hughes 1977)。 行政府の未接触地域への影響は,交易品,とりわけ鋼鉄製の斧を通して浸透していっ た (Crittenden and Schieffelin 1991: 134)。フォイは、ファスやイコビ、サウと伝統 的に交易関係を持ち15)、Beaver がフォイと接触したときには、フォイはすでに鋼鉄 製の斧を持っていた(Crittenden and Schieffelin 1991: 133)。従って,交易ルートを 通して、フォイには白人の情報がもたらされていたと考えられる。

また,メメノマボの死亡事件が起きたとき,パトロール報告書によれば,カヌーか ら川岸に上陸したのはニューギニア人の警官達だけで,白人の Chance と Healy は カヌーの中にとどまっていた。メメノマボは白人を見ていないことになる。

白人達とはすでに友好的な出会いをし、交易を行い、他の集団からも断片的にでは あったにせよ情報を得ていたと推定されるにもかかわらず、なぜフォイはパトロール

隊を恐れたのであろうか。実際、メメノマボらが恐れたのは、「白い霊」ではなく、銃を持った「人間」だったのではないだろうか。「マトコラは Chance らがフォイを射殺しないのに嫌気がさして逃亡した」というパトロール報告書から(Hope 1979: 118)、マトコラは白人が銃でフォイを殺すことを期待して襲撃事件をステーションに報告に行ったことがわかる。フォイへの報復を白人を使って行おうとしたのかもしれない。Beaver は、サンベリギ近辺での執ような襲撃に対し、威嚇射撃をして住民を追い払っている(Hope 1979: 28-29)。従って、イコビやサウとの交易ルートを通して、銃に関する情報も伝わっていた可能性が高い 16 。バイマボの話では、銃の存在を知ることになったパトロールが Chance と Healy 以前にあったと、1つのパトロールが2つの別のパトロールになっているが、これはフォイでは Chance と Healy のパトロール以前に銃の存在を知っていたために、そのように記憶されることになったのかもしれない。

「最初の接触」の後、白人に対する見方がどのように変化したのかについて、バイマボは次のように語っている。

最初に白人が来た時には、白人を霊だと思って、人々は皆怖がってブッシュに逃げてしまった。しかし、二人の少年が白人から贈り物をもらった。白人は、鏡に顔を映して髪を撫でつけて見せ、マッチを擦って火をおこし、ブッシュナイフで草を刈って見せ、斧で木を切って見せた。二人はこれらの物を持って来て、人々に使い方を説明し、ブッシュから戻ってくるようにと人々を説得した。初めは訳が分からずにブッシュへ逃げていた人たちも、やがてそれらの物がとても便利な物だと分かり [白人が立ち去った後ではあるが] ブッシュから出て来た。また、ケタブボゴがコンスタブルになって戻ってきて、人々に白人の事を詳しく説明した。それで、次に白人がやって来た時にはもう誰も怖がらなかった。白人がやって来るまで、我々はマッチ、服、ブッシュナイフ、鋼鉄製の斧、鏡などを知らなかった。今我々はこうした物を使っている。

ここで語られているのは、白人がもたらした物資を、初めは無知であったために理解できなかったが、やがて使い方がわかるようになると、その物資の魅力によって、 白人が「恐ろしい霊」から「歓迎されるべき人間」へ転換したという話である。

Chance と Healy の次に低地フォイへやって来たパトロールは、1937年の Champion と Andersen である。これはクトゥブ湖畔に行政府のステーションを建設する ために行われた。このパトロールに関し、フォイでは、「二人の白人がやってきてクトゥブ湖へ行きたいと言うので、クトゥブ湖岸出身の妻を持つ男性が案内し、他の何

人かは通訳や人夫としてついて行った」と言われている。

インフォーマントのボラベ(推定50代後半,ワモノメナの息子)は,白人との接触についてこう語る。

自分が小さい頃,白人がキコリからやって来た。怖くて両親とブッシュへ逃げ込んだ。「turu amena wabobao(天上界の男が来たぞ)」と言って,皆怖くて隠れた。白人は塩をくれた。口に入れると塩辛かった。肉の缶詰と米をくれると言った。父がもらってきて,米を竹に入れて料理し,缶詰と混ぜて食べるととてもおいしかった。米を「i kugu kui(花の種サゴ椰子)」と呼んだ。父は「天上界の男がやって来て,この食べ物を持ってきた」と話した。[実際には]白人は,我々の戦闘を止めさせるためにやって来た。

ボラベが述べている接触は、明らかに Champion と Andersen のパトロール(或いは、それ以降のパトロール)のことだが、そこでも「天上界の男がやってきた」と話されている。しかし、ボラベの父親は、Chance と Healy から西欧の物資の使い方を教えられ、それを人々に伝達して、怖がらずにブッシュから戻ってくるようにと説得したワモノメナである。さらに、Champion と Andersen を案内したのはコンスタブルのケタブボコである。また、このパトロール隊はカルアとソロタゲの両コミュニティに宿泊しており、ソロタゲに住む何人かはパトロールに同行して、クトゥブ湖まで行っている。

1950年代に入ってからは、フォイの居住地に定期的なパトロールが行われ、さらにキリスト教の布教活動を通じて白人との接触も頻繁になり、西欧の物資が急速に流入した。そこで彼らが接したのは、圧倒的な物質文化であり、権力であった。クトゥブ湖周辺のフォイは、「最初の接触」時から熱心に交易を行ったという記録からも「パ、西欧の物資は当初から垂涎の的であったことがわかる。石器、動物の骨などから作られた槍や弓矢を使用していた人々に対し、銃器で武装したパトロール隊は、命令に従わない人々を牢獄へ連行した。また、ミッションによって、彼らの伝統的習慣・宗教・儀礼などは野蛮なものであると教え込まれ、多くのことが禁止された。

こうした不均衡な交流の中から、「接触以前の自分達は無知であったので、白人を 霊だと思って怖がったが、白人は自分たちが知らなかった優れた物資をもたらし、や がてそれを理解し怖がらなくなった」という話が生まれた可能性はないであろうか。

おわりに

サーリンズは『歴史の島々』で、ハワイの原住民が西欧人との「最初の接触」をど う解釈したのか,彼らの認識の枠組みの中でキャプテン・クックがどのように位置づ けられたのかを論じている。ニューギニアにおける「最初の接触」は、キャプテン・ クックの航海と違って,ある程度の規模で組織され,準備された探検隊によって意図 的にコミュニティと接触しようとするものだったという相違はあるが、ハワイと ニューギニアの「土着の人々」の解釈には類似点がある。サーリンズの言うように、 西欧人との「最初の接触」という出来事は、彼らの認識の枠組みの中で解釈されたの であり、ニューギニア人には「霊がやって来た」と理解された、という説明は一見もっ ともらしく聞こえる。しかし,ニューギニアでの「最初の接触」は,時期も状況もパ トロール隊もさまざまであった。殺戮が起きた場合もあるし、友好的な出会いもあっ た。また,パトロール隊には,数人の白人に対し,数十人のニューギニア人の武装し た警官や荷物を運搬する人夫が同行していた。接触以前に交易ルートを通じて,近隣 のコミュニティから白人のもたらした物資や情報を得ていたと思われる事例も多い。 それにもかかわらず,パプアニューギニア各地で,「最初の接触」では「白人を霊だ と思って怖かった」という語りが流布している (Connolly and Anderson 1987; Schiffelin and Crittenden 1991)

フォイの事例から、「白い霊がやって来た」という表現は、西欧の視点と全く異なる彼らの固有の視点や解釈なのではなく、接触後の不均衡な交流の結果として、白人の土着の人々に対するまなざし――「人々が驚愕することによって、自己満足と楽しみを得る」といった――を自ら取り込みながら、ニューギニア人の「最初の接触」の物語が再構築されていった、という仮説は成り立たないであろうか。Beaver の記録によれば、フォイは Beaver と出会ったとき(これはおそらく白人との「最初の接触」であったにもかかわらず)、驚愕も混乱もせず、友好的で協力的であった。「霊がやって来た」と恐れたと思われるような記述はない。そして、この出会いは特異な出来事としてフォイの中で伝承されることもなく、忘却されてしまったと推察される。一方、フォイの側で記憶される「最初の接触」は、一人の男性が死亡し、5人が捕えられたChance と Healy のパトロールであり、パトロール隊との諍いは、白人を「白い霊だ」と誤解したために起こったと解釈されている。

オセアニアでは、春日(1999)が述べるように、キリスト教によって「〈劣ったわ

れわれ〉対〈すぐれた白人〉の構図を受容し(中略)キリスト教への絶対的信頼と白人の優越性を内面化した」歴史を持つ(春日 1999: 13-14)。時期的には他のオセアニア地域とズレはあるが、ニューギニアにおいても状況はこれと同様であり、その過程で「無知であったわれわれは白人を霊だと思った」という物語が再構成されていったとしても不思議ではない。

すなわち、「最初の接触」という出来事が、彼らの世界観の中で従来の図式にのっとって解釈されたというよりも、現在のコンテクストの中で過去の出来事が解釈され、再構成されたと理解する方が適切だと思われる。当然の事ながら、ニューギニアには「白人を霊だと思った」人が全く存在しなかったと主張したいわけではない。むしろ、そのように捉えられたと考えられる事例も多い。しかし、ニューギニア各地に極端に類型化された語りが繰り返し現れて来るのは、白人との接触が頻繁になって以降の事であるという仮説も成り立ち得るのである。当時の人々が「白人を霊だと思った」という表現自体は、ある意味では、それが語られる現在という時点での再解釈であり、それは接触当時のまなざしでなく、現在のまなざしである。彼らにとっての「最初の接触」というのは、あくまで人々の語りの中に存在する「現在の話」なのである。

謝辞

草稿に目を通し、貴重な助言を頂いた東京大学の船曳建夫教授と東京外国語大学の栗田博之 教授に感謝いたします。

注

- 1) フォイ族とは、トランス・ニューギニア言語門、中部・南部ニューギニアークトゥブ上位言語系、クトゥブ言語系フォイ語を話す言語集団のことを指す。フォイの居住地域は、3つに下位区分される。ムビ川下流域の低地フォイ、ムビ川上流の高地フォイ、クトゥブ湖周辺のクトゥブであり、各地域では言語的に若干の違いがある。
 - 現地調査は政府の関係機関の許可を得て、1992年から1996年にかけて計3回延ベ29ヶ月間実施したが、大和銀行アジア・オセアニア財団とトヨタ財団の研究助成金から財政的支援を受けた。調査を支援して下さった関係諸機関並びに関係者に感謝の意を表したい。また、筆者を暖かく迎え、惜しみない援助と協力をいただいた調査地の人々にこの場を借りてお礼申し上げたい。
- 2) 筆者は資料として,関連する Patorol Reports, Annual Reports を入手する事が出来なかったため、他の文献資料——主に Hope (1979)——に依拠している。Hope (1979) は、パプア側の主に1912年から1929年までに行われたパトロールと行政府の影響の拡大に関して、Patorol Reports, Annual Reports を多数引用しながら整理している。
- 3) Schieffelin and Kurita (1988) で述べられているように、人々の記憶はしばしば2つの別のパトロールを一緒に記憶していたり、1つのパトロールを2つの別のパトロールと考えてい

る事があり、資料としての扱いが難しい。また、フォイで最初の接触時に生まれていたのは 最長老の男性1人になってしまった、という制約もある。一方、パトロール隊の記録も、未 踏破地帯の探検であるために、しばしば地理的記述が不正確である。

ロ頭伝承を歴史資料としてどう評価するべきかについてのこれまでの論争は, 栗田 (1988) で触れられている。

- 4) 「地図2」は、次の文献内の地図を参考にして作成した。Kurita (1985: 57), Schieffelin and Crittenden (1991: 37), Schieffelin and Kurita (1988: 65)。
- 5) Kandobo, Gobe, Kaiputage, Sorotage, Humane, Wabigese, Kafa の7つ。ただし, Kaiputage は1993年から近隣の新しい土地に移住する準備を始め、1996年にはほとんどの住民が移住していて、Surababo と呼ばれていた。
- 6) トゥギリのステーションは1940年に閉鎖され、1949年にクトゥブ湖北岸のタゲ(Tage)に再建された。非福音外地伝道団(Unevangelized Field Mission)がイヌ(Inu、クトゥブ湖北岸)とオロカナ(Orokana、高地フォイ)に伝道基地を作り、オーストラリア人夫妻が着任した。
- 7) フォイの生活については槌谷(1997; 1999a; 1999b)参照。
- 8) ビーバー滝は7つの滝から成り、パプアニューギニアで最大の滝と言われている。滝はカンドボ・コミュニティのムティ・クランの土地にある。
- 9) コンスタブルに指名されると制服とわずかな報酬を受け取り、義務は不品行を報告することと逃亡した囚人を捕らえること、政府の衛生と畑に関する方針を実施させることであった (Hope 1979: 57-58)。
- 10) バイマボから話を聞いたのは1993年11月である。1994年に一旦調査を終え帰国し、1995年 6月に再び訪れたとき、バイマボが亡くなったことを知った。「最初の接触」について長時間 にわたり話をしてくれたバイマボに、心から感謝と哀悼の意を表し、本論を捧げたい。
- 11) 現在栽培されている瓜形のキュウリは、西欧人によってもたらされた。それ以前は、もっと小さなキュウリを食べていたという。
- 12) その当時は、ブッシュに遺体を置く棚状のものを作って、遺体を置いて下で火を焚き、骨になると収集して仮安置しておき、数年後に儀礼 (kigi ho) を行ってから、各クランの骨を納める洞窟に持って行った。メメノマボの遺体は、白人が帰った後、掘り返したが、腐っていたので再び土をかぶせたという。キリスト教の普及と共に土葬になった。
- 13) 栗田の報告によれば、ファスのあるインフォーマントはこの事件についてこう語っている。「イコビ族のマトワラという男が初めて白人をファスの土地に連れてきた。この時、父は妻(インフォーマントの母親)が白人に寝取られたと疑った。そこで、後に白人がカンドボにやって来た時、父達はフォイと一緒に白人と戦った。キャンプの中にいた二人の白人がベッドに入ったとき、フォイとファスは一緒に襲撃した。ファスとフォイは多数が銃で撃たれ、槍が白人の1人に当たった。1人の警官と6人の人夫が殺された。仕返しに、次に白人がやって来た時、カンドボの人々を全員銃で撃った。そしてカンドボ、フマネ、ゴベのロングハウスを焼いた」(Kurita 1985: 62; Schieffelin and Kuirta 1988: 54-55)。筆者の調査では、この話を裏づけるようなカンドボでのパトロール隊への襲撃事件やその後の報復事件の情報は全くなかった。
- 14) Chance はキコリに到着する直前に高熱に襲われ、さらに、キコリに帰ると妻が病気のために病院に運ばれていることがわかり、翌日妻の病院へ向かうためにキコリを出発した。いつ報告書が書かれたのかについて疑問が持たれており(Hope 1979: 121)、このことが両者の食い違いに影響している可能性もある。
- 15) Williams 1940-41, Langlas 1974, Crittenden and Schieffelin 1991 参照。
- 16) 銃をいかにニューギニアの人々が恐れたかは、ハイヅ (1942) の日誌でも明らかである。
- 17) 1936年に行われた Champion と Adamson の Bamu-Purari パトロールは、ファスの領域の北部を東進し、クトゥブ湖に到達した。フォイは友好的に接触し、熱心に Champion と交易を行った(Sinclair 1988: 156-170)。湖岸のフォイにとっての最初の接触はこのパトロールである(Busse, Turner and Araho 1993: 20)。しかし、キュリの政府のステーションから定期的にパトロールされている村々との交流により、白人の存在はすでに知られていた(Sinclair 1988: 164)。

文 献

Busse, M., S. Turner, and N. Araho

1993 The People of Lake Kutubu and Kikori: Changing Meanings of Daily Life. Port Moresby: Papua New Guinea National Museum.

Connolly, R., and R. Anderson

1983 First Contact (Film). Sydney: Australian Broadcasting Commission.

1987 First Contact. New York: Viking.

Crittenden, R., and E. L. Schieffelin

1991 The Back Door to the Purari. In E.L. Schieffelin, and R. Crittenden (eds) pp. 125-146.

ハイヅ, J.G.

1942 『ニューギニア探検記』(妹尾韶夫訳), 東京:博文館。(Hides, Jack G. 1973 Papuan Wonderland: The Story of "the Most Difficult and Dangerous Patrol Ever Carried Out" in Papua-New Guinea, Arkon Paperbacks. Sydney: Angus & Robertson. first published in 1936, Glasgow: Blackie & Son)

Hope, P.

1979 Long Ago is Far Away: Accountants of the early exploration and settlement of the Papuan Gulf area. Canberra: Australian National University Press.

Hughes, Ian

1977 New Guinea Stone Age Trade. Canberra: Department of Prehistory Research School of Pacific Studies, The Australian National University.

春日直樹

1999 「オセアニア・オリエンタリズム」春日直樹編『オセアニア・オリエンタリズム』 pp. 5-27, 京都:世界思想社。

Kurita, H.

1985 Who Came First? The First Contact History of the Fasu-Speaking People, Papua New Guinea. *Man and Culture in Oceania* 1, 55-66.

栗田博之

1988 「歴史のマーカーとしての地名と人名――パプアニューギニア,ファス族の歴史意識 について」『民族学研究』52(4), 299-326。

Langlas, C.

1974 Foi Land Use, Prestige, Economics, and Residence: A Processual Analysis. Ph. D. dissertation., University of Hawaii.

サーリンズ, M.

1993 『歴史の島々』(山本真鳥訳),東京: 法政大学出版会。(Sahlins, M. 1985 *Islands of History*, The University of Chicago)。

Schieffelin, E. L.

1991 Introduction. In E. L. Schieffelin, and R. Crittenden (eds), pp. 1-11.

Schieffelin, E. L. and R. Crittenden (eds)

1991 Like People You See in a Dream: First Contact in Six Papuan Societies. California: Stanford University Press.

Schieffelin, E. L., and H. Kurita

1988 The Phantom Patrol: Reconciling native narratives and colonial documents in reconstructing the history of exploration in Papua New Guinea. *Journal of Pacific History* 23(1), 52-69.

Sinclair, J.

1988 Last Frontiers: The Exploration of Ivan Champion of Papua, A Record of Geografhical Exploration in Australia's Territory of Papua Between 1926 and 1946. Queensland: Pacific Press.

槌谷智子

1997 「パプアニューギニア・フォイ族の歌」『国立音楽大学紀要』31,101-114。

1999a「石油開発と『伝統』の創造――パプアニューギニア・フォイ社会の『近代』との葛藤」杉島敬志編『土地所有の政治史――人類学的視点』pp. 251-273, 東京: 風響社。

1999b「ジェンダーとコスモロジー――パプアニューギニア・フォイ族のセクシュアリティ・空間・儀礼」『社会科学ジャーナル』(国際基督教大学社会科学研究所)40,111-138。

Weiner, J. F.

1988 The Heart of the Pearl Shell: The Mythological Dimension of Foi Sociality. Berkeley and Los Angeles: University of Califoenia Press.

Williams, F.

1940-41 The Natives of Lake Kutubu. Oceania 11(2), 121-157; 11(3), 259-294; 11(4), 374-401; 12(1), 49-74; 12(2), 134-54.

山下晋司・山本真鳥(共編)

1997 『植民地主義と文化――人類学のパースペクティブ』,東京:新曜社。

Government Documents

Lake Kutubu Patorol Report 1, 1938-1939, I. Champion and C.T.J. Adamson. Lake Kutubu Patorol Report 2, 1938-1939, I. Champion and C.T.J. Adamson. Lake Kutubu Patorol Report 3, 1938-1939, C.T.J. Adamson and A.T. Timperley. Lake Kutubu Patorol Report 10, 1938-1939, I. Champion and A.T. Timperley.